



Data 2022-65

監督: ジョセフ・コシンスキー
出演: トム・クルーズ/マイルズ・テラー/ジェニファー・コネリー/ジョン・ハム/ルイス・ブルマン/エド・ハリス/ヴァル・キルマー

👁️👁️ みどころ

近時“リマスター版”による30年、40年前の名作の“復活”が目立つし、「午前10時の映画祭」の人気も継続中。すると、本作もその1つ？

否、アメリカ海軍士官の“コールサイン”をサブタイトルにした本作は、『トップガン』（86年）の36年ぶりの新作だ。還暦を間近に“教官”として復帰してきたトム・クルーズ扮するマーヴェリックの任務は？

ウクライナ戦争が厳しい現実を世界に突きつける中、北朝鮮による核・ミサイルの脅威が増大中。そんな状況下、某国の某施設を米軍機によって破壊するという任務も、映画もハチャメチャ！そう思ったが、さて本作は？

映画はリアルさが命。それもそうだが、他方で映画は作り物。そのバランスが大事だが、さて本作は？中国映画『戦狼2』（17年）と同じように、国威発揚のピークとなるラストは大拍手！？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■トム・クルーズ主演『トップガン』が36年ぶりに新作で■□■

フィルムからデジタルへの切り替えと共に、近時は30年前、40年前の、“あの名作”、“この名作”を2K、4Kリマスター版で復活させる作業が目立っている。『トップガン』は、戦闘機パイロットを養成する最高機関「トップガン」を舞台に、若き日のトム・クルーズが大活躍した伝説的な映画で、その後の『ミッション：インポッシブル』シリーズの大ヒットにもつながった彼の出世作だ。『ロッキー』（76年）がシルヴェスター・スタロンの出世作になったのと同じように、『ランボー』（82年）はシルヴェスター・スタロンの出世作。しかして、『ロッキー』も『ランボー』もその後、続々とシリーズ化されたが、なぜか『トップガン』だけはシリーズ化されなかった。

しかし、2020年には、『トップガン マーヴェリック』がトム・クルーズ主演で製作

されることが決まり、大きな期待を集めていた。ところが、コロナ禍のため、他の多くの期待作と同じようにお蔵入り。これにてその企画はジ・エンド、と思えたが、何の何の、トム・クルーズは不死鳥のように蘇って本作を完成させ、2022年5月27日、ついに本作が日本でも公開されることに。ジャンヌ・モロー主演の『小間使の日記』（63年）（『シネマ50』237頁）やカトリーヌ・ドヌーヴ主演の『屋敷』（67年）（『シネマ50』240頁）等は、約40年ぶりのリマスター版での公開だったが、本作は還暦直前とはいえ、生身のトム・クルーズが、アメリカ海軍士官の“コールサイン”である“マーヴェリック”をサブタイトルにした新作映画で主演したもの。さあ、その出来は如何に？単なる回顧物語ではナンセンスなことは当然だから、本作は決してそんなものでないはずだ。

■□■一匹狼が教官として復帰！その理由は？その任務は？■□■

「10年ひと昔」というくらいだから、「トップガン」の超エリートだった若き日のマーヴェリックことピート・ミッチェルも、30年後の今はそろそろ引退の時期？そう思うのは当然だが、本作導入部では昇進することを拒み、現場のパイロットとして生き続けているマーヴェリック海軍大佐の姿が描かれる。

無人飛行が主流になりつつある今、有人での極超音速飛行の意義はどこにあるの？そんな議論の下で、「その分野への人的、資金的支援は打ち切るべき」というのが米国海軍チェスター・“ハンマー”・ケイン海軍少将（エド・ハリス）の考えだった。今時、有人によるマッハ10という極超音速飛行にどれだけの意義があるのかはわからないが、本作導入部では、そんなケイン海軍少将の意向を無視してマッハ10の有人飛行に挑戦するマーヴェリックの姿が描かれる。しかし、マッハ10を達成したものの、マッハ10.3の時点で機体を大破させてしまったため、かろうじて命は取り留めたものの、これだけ重大な命令違反を犯せば、マーヴェリックの軍人生命はジ・エンド！

そう思えたが、マーヴェリックの友人で、かつてのライバルだったアメリカ太平洋艦隊司令官トム・“アイスマン”・カザンスキー海軍大将（ヴァル・キルマー）は、“極秘のある任務”を遂行するため、マーヴェリックをトップガンの“教官”として迎え入れたから、アレ。それは一体なぜ？また、“極秘のある任務”とは一体ナニ？

■□■特殊任務は、有人飛行で某国の某施設を破壊！■□■

アメリカが“ならずもの国家”と名付ける国は過去にいくつかあったし、現在もある。日本のすぐ近くにある某国はミサイル発射や核実験を繰り返しているから、きっとさまざまな核施設を保有しているだろう。ウクライナ戦争の現実を見ても、今やアメリカは高度に発達した情報戦によって、“ならずもの国家”が保有している攻撃力や防衛力のほとんどを正確にキャッチしているはずだ。しかし、今、マーヴェリックが教官として実践的な指導・育成を命じられた特殊任務は、「ならずもの国家の核施設（ウラン濃縮施設）を有人飛行によって破壊し、生還せよ」というものだが、今ドキ、そんなことが可能なの？

中国大陸への進出を契機として、アメリカの敵になりつつあった、かつての大日本帝国

は、山本五十六の立案による真珠湾攻撃のため、鹿児島島の錦江湾で選りすぐりのパイロットたちに猛訓練を施したが、本作前半ではマーヴェリック教官による、それと同じような風景が登場するので、それに注目！

本作のそれを面白くさせているのは、マーヴェリックの教え子たちに、36年前の『トップガン』における“曰く因縁付きの面々”を彩りよく登場させていること。その第1は、マーヴェリックの相棒だったニック・“グース”・ブラッドショウ（アンソニー・エドワード）の息子であるブラッドリー・“ルースター”・ブラッドショウ（マイルズ・テラー）。彼は、マーヴェリックが海軍兵学校への出願を取り消し、彼のキャリアを後退させたことと逆恨みしていたが、その真相は？また、現在の彼のパイロットとしての実力は？そして、第2は、「トップガン」きっての自信家として登場するジェイク・“ハンクマン”・セレンシ（グレン・パウエル）。彼はルースターと犬猿の仲だったから、ケンカばかりしていたが、そんな状態で彼らは重大な特殊任務に就けるの？

これらのストーリーの演出の出来不出来が本作の出来不出来に直結するのは当然だが、おおむね本作はそれに成功！前作を知っている人はそれを懐かしく思い出しながら、知らない人は知らないなりにマーヴェリック教官による鼻っ柱の強い、個性豊かな教え子（パイロット）たちの訓練ぶりを楽しむことができる。ちなみに、そこには紅一点のペニー・ベンジャミン（ジェニファー・コネリー）も加わっているので、それにも注目！

■□■空母から発射！巡航ミサイルも！2分30秒以内で！■□■

ウクライナ戦争でロシア海軍黒海艦隊の旗艦であるミサイル巡洋艦「モスクワ」が沈没したことには驚かされた。しかし、今スクリーン上では、黒海以上に「太平洋波高し！」の状態が続いている。真珠湾攻撃では、当時の日本最強の空母群が威力を発揮したが、本作では米国が誇る空母「セオドア・ルーズベルト」から次々とマーヴェリック率いるトップガンたちの戦闘機が次々と発射されるので、それに注目！

彼らは敵の対空兵器のレーダーを避けるため超低空飛行で核施設に近づくわけだが、それにタイミングを合わせて巡洋艦から発射されるトマホークによって施設近くの空軍基地を破壊。それらをすべて2分30秒以内にやり遂げたうえ、帰還の途につくわけだが、コトはそんな計算通りに運ぶの？

真珠湾攻撃でも少数ながら日本の戦闘機や爆撃機の被害が出たのと同じように、この特殊任務決行の犠牲者は？それは、絶体絶命と思われたルースターになりそうだったが、マーヴェリックが自ら“おとり”となって彼を救ったため、マーヴェリック機は撃墜され、マーヴェリックは陸上で孤立することに。さあ、彼の運命は如何に？

■□■撃墜された2人は敵地からどう脱出？そうだ、F14を！■□■

映画はいくらリアルさを追求しても所詮作り物だから、なんでもあり！本作でトム・クルーズを含む俳優たちは、常人の限界を超えるG（重力加速度）が加わる実際の戦闘機に搭乗して過酷な撮影に挑んだらしい。そのため、スクリーン上にはあまりのG（重力加速

度) 圧力のために顔を歪めるシーが続出する。そのことの是非はさておき、還暦直前にして映画制作にここまで全力を傾注するトム・クルーズの“俳優魂”はお見事だ。しかし、そんなリアルさを追求するのなら、撃墜されて敵地の真ただ中に降り立ったマーヴェリックとルースターの2人はどうなるの？

2人には過酷な拷問が・・・？それがリアルな現実のはずだが、所詮映画は作り物だから、なんでもあり！そこで脱出経路を探すマーヴェリックが見つけたのは、格納庫の中に格納されている一機の戦闘機 F14 トムキャット。なぜここに、こんな旧式の F14 があるの？そんなことはどうでもいい。問題はこれが動くかどうか。そこでモノを言ったのが、数十年間のパイロットとしての経験。敵が迫る中、ルースターを後ろに乗せ、マーヴェリックが操縦する F14 は、燃えさかっている滑走路を無事離陸し、空母への帰還の途に付いたが・・・。

■映画は何でもあり！その2■

本作を見れば、アメリカの軍人はもとより、米国民すべてが大喜びするだろう。他方、これほど一方的にアメリカにやられてしまう某国は、いくら“ならず者国家”とはいえ、さぞ腹を立てることだろう。そう思っていると、無事離陸し帰路についたと思った F14 を、某国の最新鋭の極超音戦闘機が追いかけてきたから万事休す。いくら、マーヴェリックの操縦技術や戦闘技術が優れていても、旧式と新式の戦闘機の戦いでは勝敗は明らかだ。そのことは、太平洋戦争初期には日本が誇る世界最新鋭の戦闘機だった“ゼロ戦”が、終戦期には完全に旧式になってしまっていたことを考えれば明らかだ。

それでもマーヴェリックは様々なテクニックを駆使して善戦。逆に敵機を撃ち落としたりしたもの、自機も背後に食らいつかれたから、これにて万事休す。そう思った瞬間、その敵機を打ち落としたりしたのは、応援に駆けつけてきたハングマンだったからすごい。まさに、作り物の映画はなんでもあり！その2だ。

無事、空母に降り立ったマーヴェリックとルースターが大ヒーローになったのは当然。これにてルースターとハングマンとの犬猿の仲も解消。すべてのアメリカ海軍と空軍の兵士の心は1つに。なるほど、なるほど・・・。

■還暦直前のラブロマンスも、ほど良く・・・■

戦争映画は戦闘シーンにすべてを懸けた方がベターだから、ラブロマンスは不要。そんな作り方もあるが、他方で『スターリンググラード』(01年) (『シネマ1』8頁) のように緊迫した狙撃対決と狙撃兵士同士の恋物語を両立させる作り方もある。その点、本作はいかに？

『トップガン』(86年) における、若き日のトム・クルーズ扮するマーヴェリックの恋物語は当然それなりのものがあつたが、本作では教官として「トップガン」に戻ってきたマーヴェリックがペニーに再会するところから、淡いラブロマンスの予感が発信される。もっとも、マーヴェリックが還暦直前だから、ペニーも当然いい歳のはず。しかも、マー

ヴェリックには過酷な任務が待っているから、映画がその任務の行方に大きく注目するのは当然だ。しかし、結果的に任務を大成功させたマーヴェリックが五体満足で戻ってくると・・・？

本作のラストシーンをどうすべきかについてジョセフ・コシンスキー監督は迷ったはずだが、さて本作のラストへの賛否は？ちなみに、中国映画『戦狼2』（17年）（『シネマ41』136頁、『シネマ44』44頁）では、国威を発揚するべく最後に大写しされる中国のパスポートに観客は大拍手していたが、さて本作は？

2022（令和4）年6月3日記